

第三節 3.等価形態 3.Die Aquivaletform(p75/原70)

(1) 既に見たように、一商品A(リンネル)は、その価値を異種の一商品B(上着)の使用価値で表すことによって、商品Bそのものに1つの独特な価値形態、等価物という価値形態を押しつける。

こうして商品リンネルは、それ自身の価値存在を顕わにしてくるのであるが、それは、上着がその物体形態とは違った価値形態をとることなしにリンネル商品に等しいとされることによってである。それゆえ、リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換されうるものだという事によって、表現するのである。従って、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。

(2) 一つの商品、たとえば上着が、他の一商品、例えばリンネルのために、等価物として役立ち、従って、リンネルと直接に交換されうる形態にあるという独特な属性を受け取るとしても、それによつては、上着とリンネルとが交換されうる割合は決して与えられてはいない。この割合は、リンネルの価値量を与えられているのだから、上着の価値量によって定まる。上着が等価物として表現され、リンネルが相対的価値として表現されていようと、上着の価値量は、相変わらず、その生産に必要な労働時間によって、従って、上着の価値形態に係わらず、既定されている。

しかし、商品上着が価値表現において、等価物の位置を占めるならば、この商品種類の価値量は価値量としての表現を与えられてはいない。この商品種類は、価値等式の中ではむしろただある物の一定量として現れるだけである。

(3) 例えば、40エルのリンネルは何に値するのか？ 2着の上着にである。なぜなら、商品種類上着は、ここでは等価物の役割を演じ、使用価値上着が、リンネルに対して価値体として認められているので、一定量の上着はまた一定の価値量リンネルを表現するに足りるのである。

従って、二着の上着は40エルのリンネルの価値量を表現することはできるが、しかし、それはそれ自身の価値量、上着の価値量を表現することは決してできないのである。価値等式における等価物は、つねに、ただ、ある物の、ある使用価値の、単純な量の形態をもっているだけだというこの事実の皮相な理解は、バスターをもその多くの先行者や後続者をも誤らせて、価値表現の内に単なる量的な関係を見るに至らせたのである。そうではなく、一商品の等価形態は決して量的な価値既定を含んではいけないのである。

(4) 等価形態の第一の特色は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである。

(5) 商品の現物形態が、価値形態になるのである。しかし、よく注意せよ。

この取り替え(Qidproquo)が一商品Bにとって起きるのは、ただ任意の他の一商品Aが、商品Bに対してとる価値関係の中だけでのことであり、ただこの関係の中だけでの事である。どんな商品も、等価関係としての自分自身に関係することはできないのであり、従ってまた、自分自身の現物の皮を自分自身の価値の表現にすることはできないのだから、商品は、他の商品を等価物としてそれに関係しなければならないのである。即ち、他の商品の現物の皮を自分自身の価値形態にしなければならないのである。

(6) このことを分かりやすくするには、計量に用いられる尺度の例がある。棒砂糖の重量を量るのに鉄片を使うとき、鉄片自体は棒砂糖同様に重さの現象形態ではない。しかし棒砂糖の重量を重さとして表現するために、われわれはそれを鉄との重量関係におく。この関係のなかでは、鉄は、重さ以外の何物も表していない物体と見なされる。それ故、種々の鉄量は、砂糖の重量尺度として役立ち、棒砂糖に対して単なる重さの現象形態を代表するのである。この役割を鉄が演ずるのは、ただ、砂糖とか、またはその重量が見出されるべきその他の物体が鉄にたいしてとるこの関係の中だけでの事である。鉄片が

重量尺度としては棒砂糖に対してただ重さだけを代表しているように、われわれの価値表現では上着体はリンネルに対してただ価値だけを代表しているのである。

(7) とはいえ、類似はここまでである。鉄は、棒砂糖の重量表現では、両方の物体に共通な自然属性であるそれらの重さを代表している。ところが、上着は、リンネルの価値表現では、両方の物の超自然的な属性、即ち、それらの価値、純粋に社会的なあるものを代表しているのである。

(8) ある1つの商品、例えばリンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体やその諸属性とは全く違ったものとして、例えば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それがあつた社会的関係を包蔵していることを暗示している。等価形態については逆である。等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、そのあつたまま、価値を表しており、従つて、生まれながらにして価値形態をもっているということ、まさにこのことによつて成り立っている。勿論、このことは、リンネルが等価物としての上着に関係している価値関係の中でだけ認められているのである。しかし、ある物の諸属性は、その物の他の諸物に対する関係から生ずるのではなく、生まれながらに持っているように見える。(注21:王と臣下の関係についての説明参照)

それ故に、等価形態の不可解さが感ぜられるのであるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨幣となつて経済学者の前に現れるとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせるのである。そのとき、彼はなんとかして金銀の神秘的な性格を説明しようとして、金銀の代わりに、もっと眩しくないいろいろな商品を持ち出し、かつて商品等価物の役割を演じたことのある全ての商品賤民のカタログを繰返しこみあげてくる満足をもつて読み上げるのである。彼は、この 20エレのリンネル= 1着の上着 という最も単純な価値表現が、すでに、等価形態の謎を解かせるものだということには、気がつかないのである。

(9) 等価物として役立つ商品の身体は、常に抽象的人間労働の具体化として認められ、しかも常に一定の有用な具体的労働の生産物である。すなわち、この具体的な労働が、抽象的人間労働の表現になるのである。たとえば上着が抽象的人間労働の単なる実現として認められるならば、実際に上着に実現される裁縫は、抽象的人間労働の単なる実現形態として認められるのである。リンネルの価値表現では、裁縫の有用性は、…それ自身が価値であると見られるような物体、つまりリンネル価値に対象化されている労働と少しも区別されない労働の凝固であると見られるような物体をつくることにあるのである。このような価値鏡をつくるためには、裁縫そのものは、人間労働であるという抽象的属性以外にはなにも反映してはならないのである。

(10) 裁縫の形態でも織布の形態でも、人間の労働力が支出される。従つて、どちらも人間労働という一般的な属性を持っているのであり、従つて両者は、価値の生産という場合、どちらもこの観点のもとでのみ考察されうるのである。これに関してはなにも神秘的なものはない。ところが、商品の価値表現では、事柄がねじ曲げられてしまう。例えば、織布はその織布としての具体的形態においてではなく、人間労働としての一般的属性においてリンネル価値を形成するのだということを表現するためには、織布に対して、裁縫が、即ち、リンネルの等価物を生産する具体的労働が、抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として対置されるのである。

(11) だから、具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になるということは、等価形態の第二の特色なのである。

(12) しかし、この具体的労働、裁縫が、無差別の人間労働の単なる表現として認められるということによつて、それは、他の労働との、即ち、リンネルに含まれている労働との、同等性の形態をもつのであり、

従ってまた、それは、すべての他の商品生産労働と同じに私的労働でありながら、しかもなお直接に社会的な形態にある労働なのである。それだからこそ、この労働は、他の商品と直接に交換されうる生産物となって現れるのである。だから、私的労働がその反対物の形態即ち、直接に社会的な形態にある労働になるということは、等価形態の第三の特色である。

(13) 等価形態のこの第二・第三の特色は、価値形態を他の多くの思考形態や社会形態や自然形態とともに始めて分析したあの偉大な思想家、アリストテレスに立ち戻って見れば、よりよく理解できるであろう。

(14) アリストテレスがまず第一に明言しているのは、商品の貨幣形態は、ただ、単純な価値形態のより一層発展した姿、即ち、ある商品の価値を任意の他の一商品で表現したものの一層発展した姿でしかないということである。彼は次のように言っている。

5台の寝台 = 一軒の家というのは、5台の寝台 = これこれの額の貨幣というのと「違わない」と。

(15) さらに、彼は、この価値表現がひそんでいる価値関係はまた、家が寝台に質的に等値されることを条件とするということ、そして、これらの感覚的に違った諸物は、このような本質の同等性なしには、通約可能な量として互いに関係することはできないであろうということを見抜いている。彼は云う。「交換は、同等性なしにはありえないが、同等性はまた通約可能性なしにはありえない」と。

ところが、彼はここでにわかに立ち止まって、価値形態のそれ以上の分析をやめてしまう。

「しかし、このように種類の違う諸物が通約可能だということ」、即ち、質的に等しいということは、「本当は不可能なのだ」と。このような等値は、ただ、諸物の真の性質には無縁なものでしかあり得ない、つまり、ただ「実際上の必要のための応急手段」でしかありえない、というのである。

(16) つまり、アリストテレスは、彼のそれから先の分析がどこで挫折したかを、即ち、それは価値概念がなかったからだということを、自分で我々に語っているのである。この同等なもの、即ち、寝台の価値表現のなかで家が寝台のために表している共通な実体は、なんであるか？アリストテレスは、そのようなものは「本当は存在しえないのだ」と言う。なぜか？家が寝台に対してある同等なものを表しているのは、この両方のもの、寝台と家とのうちにある現実の同等なものを、家が表しているかぎりでのことである。そしてこの同等なものは一人間労働なのである。(p81)

(17) しかし、商品価値の形態では、全ての労働が同等な人間労働として、従って、同等と認められるものとして表現されているということを、アリストテレスは価値形態そのものから読み取ることができなかったのであって、それは、ギリシャ社会が奴隷労働を基礎とし、従って、人間やその労働力の不当性を自然的基礎としていたからである。価値表現の秘密、即ち、人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性及び同等な妥当性は、人間の同等性の概念が既に民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである。しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、従ってまた、商品所有者としての人間の相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会において、

始めて可能なのである。アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちに1つの同等性関係を発見しているということの内に光り輝いている。ただ、彼の生きていた社会の歴史的限界が、ではこの同等性関係は「ほんとうは」何であるのか、を彼が見つけ出すことを妨げているだけである。

(p81)